

2023/7/28

村上市について

審査員長 手塚貴晴

十五万石の城下町である。街は武家町、町人町、寺町がかつて明確に区分けしていた名残があり、それぞれの風合いが残っている。とはいえ、武家の世が潰えて180年。武家屋敷は殆ど残っておらず、城そのものに至っては影も形もない。かつて城があったと伝えられる山が、蒼々と街を見下ろしている。幸運なことに町人町は風情が辛うじて残っている。近代的な都市開発の煽りを受け、道路拡張などが進んできたが、今は伝統的建造物群を保護することの価値に対する気付きが生まれつつある。今後美しい街として発展するのか、また他のどこにでもある街のように近代が圧倒してしまうのか、その岐路に立つ地域とって良い。町人町に完全な形で残されている町屋は少ないが、一歩下がって街をふりかえると、平入の屋根が折り重なり、独特の山並みのような畝りを形作っている。かつては石屋根であったそうで、三寸五分勾配で棟を挙げていたという。

この種の伝統的建造物群保存地区にプロとして取り組むと、いかに現在の街並みを保全するかという倫理が大切となる。しかしながら、補助金だけで街並みを保存することは難しい。誰もが美しい街並みを保存したいと考えているが、その街を作り上げてきた経済構造が変化した今になって、全く同じ建築の使い方に固執していても未来はない。古くて新しい視点が求められている。懐かしい未来が必要である。

7月28日、地元の建築士会の方々の案内で街を見て回った。その途上で嘉門亭という茶房に捕まった。古い町屋の復元である。そこで一人三千元以上もする茶を出している。復元といっても昔の通りに作り直しているわけではない。風情も昔とは違う。開口部の建具は一本レールで、戸袋に吸い込まれる設になっている。着席した当初ははめ殺しの大窓を綺麗に磨いているのかと思ったら、窓は全部仕舞い込まれていて、実は外気であることに四半時ほど気がついていなかった。ここで茶の儀式が行われる。しかし所謂伝統的な茶道とは無縁である。当主が作り上げた自己流の儀式である。手が舞を舞うよう上品に茶を立てる。モダンでありながら文化を感じる。少々高価であるがぜひ寄って頂きたい。体験は建築家の栄養である。

この村上市に美しい未来を提案してもらいたい。そこで手向けられるもてなしの心も含めて。今、村上市に限らず日本の多くの市町村が求めている懐かしい未来を。